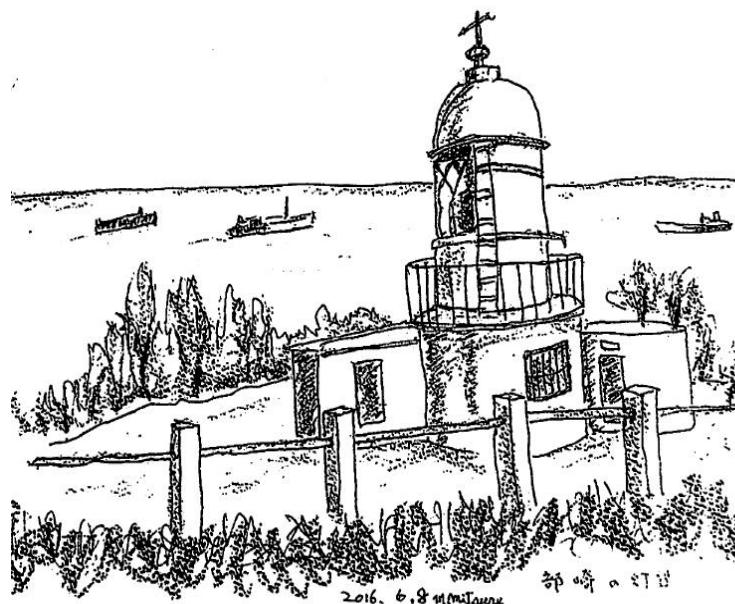


# 週報2020年9月6日



## 2020年教会標語聖句

キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。

コロサイ人への手紙 3章 15節

シオン教会信仰指標：“成熟したキリスト者を目指して”

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団

## 北九州シオン教会

牧師：山崎銀次郎

<http://jesus.holy.jp/>

〒800-0038 北九州市門司区大里原町 6-10

TEL 093-381-4395(FAX…4396)

牧師携帯 090-6737-5276



## 礼拝順序 2020年9月6日(日)

前奏	赤松真佐子 姉
開会の祈り	山崎銀次郎 牧師
信仰告白	使徒信条
	標語聖句唱和「コロサイ書 3章 15節」
讃美	新聖歌 1「いざ皆きたりて」全節
献身の祈り	山崎銀次郎 牧師
讃美	新聖歌 391「皆献げまつり」全節
聖書朗読	創世記 12章 1~7節
説教題	「信仰の旅路の始まり」
お祈り	御言葉の応答の祈り
祝福と派遣の祈り	山崎銀次郎 牧師
後奏	赤松真佐子 姉

## 交わりの三省

- \*互いに愛し合っていますか
- \*互いに赦し合っていますか
- \*互いに祈りあってますか

# 説教要約

## 創世記 12 章 1~7節

### 「信仰の旅路の始まり」

#### I. 緒論

創世記 12 章は有名なアブラハムの召命の場面です。聖書を普通に読み流すと、アブラハムの父テラが死んだ直後、アブラハムは神の語り掛けに応答し、故郷を離れたように見えます。(11:32・12:1~4まで参照)しかし、よく聖書を見ると、アブラハムがハラン(故郷)から旅立った時、父テラは生きています。その後 60 年近く生活したことがわかります。ここで聖書が示している事はアブラハムの信仰です。つまりアブラハムは神の語り掛けに応答する=祝福の基となる為に約束の地に旅立つ=父との決別、という事を決断したという事です。

アブラハムは父との決別を選択し、神に従う事を選び取りました。それは容易な事ではありません。大きな痛みが伴い相当の覚悟が必要だったはずです。何故このような決断が出来たのでしょうか?その答えは創世記 12 章 4 節にあります。アブラハムは単純に周りの状況を見て損得で物事を決めたのではなく、ただ神の言葉を信頼したのです。創世記 12 章 1~3 節の短い文章の中に祝福という言葉が 5 回出てきます。つまりアブラハムは神の祝福をなぞって生きる事を決断したのです。

前回創世記 12 章 10 節からのメッセージでお伝えさせて頂いたように、アブラハムはこのような大きな決断をした後にもかかわらず、飢饉という問題の中で、自己保身の為、神の御心に沿わない行動を繰り返します。しかし神は憐れみ深くアブラハムを愛を持って祝福し、アブラハムを信仰の道へと導き続けました。そのようにして彼の魂は碎かれ、神の約束に従う事、その従う中に祝福が満ち溢れている事を学びました。「祝福の神と共に歩む」「神と共に歩む人から繰り広げられる祝福」これが創世記のテーマです。今日の私達に与えられたテーマは「自己中心的生活からの決別」、「神の祝福を選び取る」です。

#### II. 本論(証)

今年の 5 月、APTS(フィリピンの神学校)の教授が召された事を知りました。マレーシア人の女性宣教師で、いつもニコニコしていて、本当にたくさんの事を教えてくれた先生でした。私が APTS を卒業した 2018 年、この時私は一時日本に帰国し、又学校に戻って勉強するつもりでした。帰国前、お互に「これはさよならではない、またね!」と言いました。しかし、この言葉が地上での最後の言葉になりました。

私は正直、「学校の生徒じゃなくても、どこかで又会える」と思っていました。しかしその訃報を聞き、「もう感謝の気持ちを伝えられない、直接教わる事が出来ない」。悲しみの気持ちで一杯になりました。学校側はオンラインでその先生を偲ぶ会を持ちました。大勢の人がインターネット上ですが集まり、先生との思い出を語り合い、肉体の死を悼みつつも、又天国での再会に希望を持ち、それぞれの遣わされた地へ帰りました。

私は、この事を通じてもう一度、自分達の使命を再確認しました。それは私達、全ての信仰者の道は主によって集められ、又主の恵みを押し流すためにそれぞれ出ていくという事です。その歩みを全うされて、天の父の御許に帰られた先生。この事を通じ、「又天国でね!」というメッセージが聞こえるようでした。私が今できる事は共に主によって集められた兄弟姉妹と祝福を共にし、又それぞれ遣わされた全ての兄弟姉妹の為に祈る事です。それが祝福をなぞる事だと、又今日の朝教えられました。

#### III. 結論

アブラハムの新しい旅路は人間の目から見て希望が全く見いだせない状況です。この時からサラの胎は閉ざされている事がわかっていて(創世記 11:30)、約束の地においても頼れる人がいません。そして自分が培った能力や知識も全く生かされない状況です。その中で、今までの自分の生活を捨てるという事は「死」を意味すると言っても過言ではありません。しかし彼が父との決別を選ぶことが出来たのは「祝福の基、神を信じたから」この一言に尽きます。

信仰生活の中で私達が新しい一步に中々踏み出す事が出来ないのは、その先にある生活の確実性が見えてこないからです。そして私達は頭の中でそろばんを弾き、計算が始まります。「どちらの道が得だろうか」と。そして自分の頭で考える安定した道を選び取ります。しかし神への信頼を抜きにしてビジョン(神の計画)の実現はやってきません。信仰のチャレンジに対して一步踏み出す秘訣は主を信頼する事だけです。

神に信頼し、新しい一步を踏み出す時、信じた通りの事が起こります。つまり自分には神様から祝福が託されている事、その歩みを通じて多くの人が神様の祝福にあずかる事です。それは生きる人生ではなく生かされる人生です。私達の信仰の旅路は、この地上の生活の中で主の祝福が余すことなく満ち溢れている事を学ぶ為にあります。結論として、神への信頼=信仰の旅路の始まりです。私達の人生はその繰り返しを経て、神の栄光に近づいて行きます。共に主を見上げて前進してまいりましょう。